

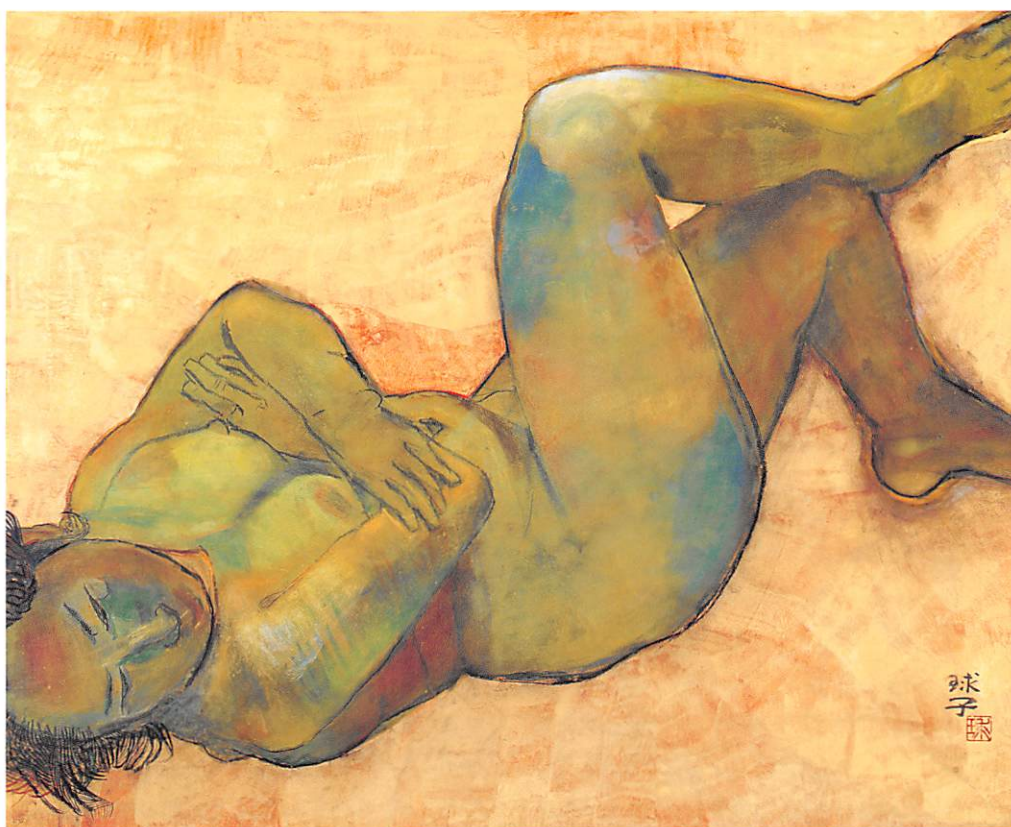


会 報

第27号

平成7年8月

社団法人 北海道美術館協力会
札幌市中央区北1条西17丁目 電話011-644-4025



平成5年 紙本彩色・額 71.0×89.5cm

新収蔵作品 片岡球子 「横たわる裸婦」

札幌生まれの片岡球子（明治38～）は、戦後日本画壇を代表する女流画家で、現在も日本美術院を舞台に精力的な創作活動を続けている。院展初入選以来、時に土俗的とも評される個性的な作風を展開し、〈伝統芸能〉や〈火山〉シリーズ、さらに歴史上の人物を解釈した〈面構え〉^{つら顔ま}シリーズなどで高い評価

を得てきた。その画家が、昭和50年代後半に70歳を過ぎてから、新たなシリーズとして取り組み始めたのが〈裸婦〉である。現実の「女そのものの美しさ」をいかに表現するかという課題に挑戦したというが、この近作では生命感をたたえた豊かな量感の裸婦像が見事に描き出されている。

ボランティアの ● アムビバランス



佐藤 直一
(前 専務 理事)

健康上の理由から3年間の専務理事の任を解いていた
だけ、一步離れた気持で協力の姿に思いをめぐらして
いると、いままで格闘していた現実の問題も、遠近法的
なそれぞれの位置づけをもっていることに気付かされる。
拙文の寄稿を求められた機会に、これまで私がひそかに
痛感してきたボランティアの人びとがもつ悩みについて
雑感を述べてみたいと思う。

それは、ボランティアの意識がアンビバラント（正反
対の感情の共存）な状況にいつも置かれることへの同情
である。協力の発足は数人の先覚的な婦人たちの発意
と努力で、少人数グループの自主的、自発的奉仕として
近代美術館の開館とともに始まったもので、その限り
においては、組織、役割、ルールも仲よしクラブ的な申し
合せでこと足りるものである。これはボランティア活動
の一つの原点であって、その精神と原型をできるだけ活
かしたボランティア活動であろうとする努力を忘れては
ならないものである。しかし、実働する少人数のボラン
ティアだけで毎日の奉仕活動を継続することは不可能で
ある。わが協力がその活動の母体となる組織として前
もって設立されたのは必然的なりゆきであった。美術
館側の要請もあって、ボランティア活動は当初の売店か
ら解説、資料と範囲をひろげるとともに、ボランティア
に求められる資質、能力も次第に高度なものとなって、
美術講座、養成講座などの充実がはかられ、ボランティ
アに加わる重荷も増大してきたのである。このことに関
してはボランティアの人びとは重荷を感じつつも納得で
きる事態であろうかと思う。しかし反面、協力会自体は、
事業の増大、ボランティア数の膨張、また、それらに伴
って生ずる部門間、個人間の調整需要などに対処するた
めに、組織、ルールの強化をはからざるを得ないことにな

る。さらに協力は、美術館への協力のほかに、美術に
関する道民の知識と教養の向上に必要な事業を行うこと
を目的に掲げているので、館外活動の展開を旨として組
織、機能を整える必要がある。この必要に応えるために
断行されたのが一昨年の組織改正であった。これは正直
にいったなかなかボランティアの人びと全体になじみに
くく、浸透するのに時間がかかった。その最大の溢路と
なったのは、最初に指摘したボランティア活動の原点で
ある。少人数の仲よしクラブ的自主的自発的運営を現在
の自分たちの活動形態の中にもち続けたいとする欲求と、
会の組織、ルールの強化がもたらすマネジメントの力
に対する葛藤であった。ボランティア自身も組織とルー
ルの必要性にはかなり目覚めつつあるが、このアムビ
バランスはまだしばらくは続くだろう。

もう一つのアムビバランスは、美術館側の要求する活
動水準の高さに起因する。たしかに、美術作品の解説を
はじめ、資料整理、売店の旧部門も、事業、広報、研修、
特別活動の新部門も、いずれのボランティア活動にも不
断の研修によって蓄積される資質と能力が不可欠のもの
であるが、それにしても私が伝聞する限り、かなりの緊
張感と圧迫感をボランティアの人びとが感じているよう
で、そのことは、彼らはあたかも美術館の組織下、指揮
下に直属しているような錯覚を与えている。しかし、他
面で彼らは自分の資質と能力を少しでも高め、美術館の
格調をそこなわない活動をしたいとねがう人びとである。

私も資質と能力の高さを養うことに賛成であるが、ボ
ランティアたろうとする人に求めたいのは、マルチン・
ルターの言った「何者にも従属しない自由な君主である
と同時に、何者にも従属する奉仕の僕」というアムビ
バランスの上に耐えて立ってほしいということである。

壁を破りたい

— 万古不易の命題 —

1 もっと増えて欲しい会員数

会員の拡充については、亡くなられた元副会長の建部直文さんが本誌15号に「万古不易」の命題なのかもしれないと記されております。まさにそのとおりで、会員を増やすことは容易なことではありません。しかし、毎年下降線をたどることなく微増ではありますが上昇線を描き続けていることは、みなさんとともに喜びたいと思います。

関係者の地道な努力の集積がこの結果を生んでいると考えますが、もっと広い範囲で会員が増えてもいいのではないかというのが会務に携わる者たちの共通した意見であり、願いでもあります。会員数2,000の壁を何とか突破したいものです。

2 会員数の増に期待するものは

会員増の狙いは、美術に関心のある方にひとりでも多く参画してもらい、事業等ももっと充実させて楽しい会にしていこうということ。もうひとつは、事業やそれを担当するスタッフの拡大充実に必要な会費の収入増に期待することのふたつであろうと思います。

当会は、ボランティア活動が主体となって動いている団体ですが、だからといって費用を要しないわけではありません。ボランティアの活動領域が広がり、活動員の数も大きく膨らんできました。今後、事業の充実拡大とともに、その膨張係数も大きくなるものと予想されます。これらに対応した財源確保のクリヤは、なんと言ってもも自助努力を第一義と考えなければならないでしょう。

3 美術館協力は知られているのでしょうか

美術講座に参加した人に「協力会」を知っていましたかという問いに対して、知らなかったという人が毎年結構な人数にのぼっています。当会はやがて創立20周年を迎えようとしています。画期的なPR作戦を必要とする時期といえるでしょう。また、「美術館協力会」という名称は、人びとに親しまれているのでしょうか。なにか堅苦しい、ひと工夫あってもいいのではないかという意見もあります。理事とボランティアの代表による委員会では、会員拡充に焦点をあてながら、いまこのことについて鋭意検討を重ねています。

4 美術を楽しみながら、心豊かな生活を

いま協力会では、より多くの人たちに「気楽に美術を楽しむ、心豊かな生活」を送ってもらえるよう、みなさんの協力を得ながらすすめていこうという方向が浮き彫りにされてきています。ともすると「美術」というのは、一般の人たちにとって縁遠いもの、堅苦しいもの、取っ付きにくいもの、わかりづらいもの、といった先入観から敬遠されがちな側面をもっているようです。これを取り除く努力をしていこうということでもあります。

これらの指針を基本にとらえながら、21世紀にむけての夢は大きく膨らもうとしています。会員のみなさんをはじめ多くの住民のみなさんのより一層のご理解、ご支援に期待するところが大きいのです。

北海道立近代美術館

平成7年度後半の展覧会としては、まず「横山大観—海・山・空の世界」〈8月26日(土)～10月1日(日)〉が開催されます。近代日本画の巨匠・横山大観は、晩年の富士の連作はもちろん、遡って明治期の朦朧体と呼ばれた没線描法や、その後の絢爛たる彩色画、詩情豊かな水墨画などにおいても、自然を主題とする数多くの名作を生み出しています。初期には西洋画の刺激のもと、風景画において空間表現を果敢に探求し、さらに画業を進めて東洋的な精神主義を強めてからは、無窮の存在ともいえる自然に想いを得て、大観独自の表現を展開していきます。本展では、海・山をはじめ、自然を主観とした名作約八十点を精選し、北海道で初めて本格的に大観芸術を紹介します。

この後開催されるのが「希いをぬう・喜びをつなぐ李王朝時代の刺繍と布」〈10月7日(土)～11月26日(日)〉です。宮廷の刺繍屏風から花嫁衣装などの服飾、ポシャギと呼ばれる多目的の布まで、ソウルの韓国刺繍博物館の名品が出品されます。

同時期、これくしょん・ぎゃらりいでは「北のトボス—四人の原風景」〈～翌年1月28日(日)〉が開催されます。岩橋英遠・神田日勝・木田金次郎・砂澤ビッキの、北の大地に根ざした優れた芸術世界を紹介します。

さらに、年明けの「北京・故宮博物院名品展」〈2月4日(日)～25日(日)〉では、同博物院の全面的な協力を得て、未公開の皇帝ゆかりの宝物約200点を展覧します。その他、「シャガール—愛のかたち」〈2月4日(日)～3月3日(日)〉や、平成6年度に画家自身から寄贈された作品約20点を初公開する「個性（こころの旅路—片岡球子）」〈3月7日(木)～4月7日(日)〉など、多彩な展覧会が開催されます。



横山大観「正気放光」（榎原神宮蔵）

北海道立旭川美術館

*「孤高・異端の日本画家 田中一村の世界展」

9月15日(金)～10月15日(日)

田中一村（いっそん、1908～1977）は、生前ほとんど画壇から忘れられた存在であったが、昭和59（1984）年に日曜美術館で紹介され、その後、全国各地で展覧会が開かれて大きな反響を呼んだ日本画家である。

彼は栃木県生まれで、少年時代から絵の才能を発揮し、東京美術学校日本画科に入学したが、わずか3か月で退学している。彼の絵画に対する純粋な考え方や、自作への強い自信は、かえって自らを孤立させる場合が多かった。彼は家族と共にしばらく東京で暮らした後、千葉に移り住み、青龍社展などに出品した。四国、九州から沖縄へと旅行し、南国奄美大島の自然に魅了された彼は、昭和33（1958）年、奄美大島に移住し、画壇から隔絶した環境の中で亡くなるまでの20年間を過ごした。

自然描写を得意とした彼の作風は、豊かな色彩にあふれている。特に、奄美大島での作品には、南国の自然や動植物が生命感に富んだ表現で活写され、写実的であると同時に深い幻想的な世界が生み出されている。今回の展覧会は新たな調査によって発見された作品を多数加え、文字どおり田中一村の全貌が紹介される。奄美の自然の中で、自らが納得行くまで描いた孤高の画家の生涯と芸術は多くの人々の共感を呼び起こすだろう。

*「小熊秀雄／村山陽一／丹野利雄—夭折の画家たち・旭川篇」

11月3日(金)～12月17日(日)

旭川にゆかりのある3人の夭折の画家を紹介する展覧会。小熊秀雄（1901～1940）は大正から昭和戦前期にかけて活躍し、詩人として高い評価をすでに得ているが、絵画や美術評論の面でも再評価すべき独自の活動を行った。村山陽一（1926～1961）は、戦後まもなくの旭川で北海道アンデパンダン展の中心的存在として活躍し、旭川の前衛美術活動の担い手であった。丹野利雄（1950～1983）は、1970年代から旭川の若手作家たちとともに幅広いコンテンポラリーな活動を行った作家で、惜しくも事故で亡くなった。これら、それぞれ、戦前、戦後、そして現代という世代を異にする3人の画家の作品と生きざまを紹介する試みである。



田中一村「アダンの木」

北海道立函館美術館

今年度後半の当館の展覧会予定を紹介します。

まず特別展として、8月26日～10月1日は「現代具象絵画の巨匠 ビュッフェ展」を開催します。くすんだ色彩と切り裂くような鋭い描線で、戦後の絶望と不安をいち早く表現したベルナル・ビュッフェ。この展覧会では、ビュッフェ自身が選んだリストをもとに、初期の作品から最近作にいたる77点の油彩作品により、その50年に渡る画業を振り返ります。次いで10月7日～11月5日は「横山大観—海・山・空の世界展」と題し、近代日本画に多大な足跡を残した横山大観の画業のなかから、とくに自然を主題とする名作に焦点を当てて紹介します。精緻な自然描写のなかに深い精神性を感じさせる大観芸術の世界をお楽しみください。続く11月11日～12月22日は「蛭子善悦展」を開催します。蛭子善悦は函館で青春時代を過ごし、国画会を中心に活躍したのちパリに渡り、1993年に亡くなるまで同地で制作活動を続けました。本展では初期の前衛的な作品から、渡仏後の柔らかな光に満ちた風景画、静物画にいたるまで、その全画業を回顧します。年が変わり、1月20日から2月18日までの「道南の美術展」では、戦前の洋画に焦点をあてた前回に続き、戦後の動向の一側面を検証、また2月24日から3月24日までの「現代日本版画の一断面」では、バラエティーに富んだ現代日本版画の世界を道立近代美術館のコレクションにより紹介します。

そのほか、当館の所蔵品を紹介する「ミュージアム・コレクション」では、第3期の10月7日から12月22日まで、田辺作品のなかでも、日本的な情緒を持つ昭和初期の作品を展示する「田辺三重松—新日本主義への接近」と鷗亭コレクションのうち、清末の書画家で日本にも大きな影響を与えた呉昌碩の作品を中心とした「東洋の美術—呉昌碩を中心に」を開催します。続く1月6日～3月24日の第4期では、昨年度収集した河原温や高松次郎の作品などを中心に紹介する「現代美術の文字・記号」と、金子鷗亭に始まる近代詩文書の作家たちを取り上げる「近代詩文書の世界」を行います。あわせてご覧いただければと思います。



蛭子善悦「カナヌタ映え」
1991年

北海道立帯広美術館

平成7年度下半期の展覧会事業についてご紹介します。

まず、9月9日(土)から10月10日(火)までは、「ルオー版画展」を開催します。フランスの画家ジョルジュ・ルオーは、キリストをはじめとする聖書中の物語や、サーカス芸人、娼婦といった人々の姿を、太く力強い輪郭線と濃厚な色彩という独特のスタイルで描いたことで知られています。ルオーは30代半ば以降、版画の制作にも着手しています。さまざまな技法を用い、長い年月を費やして作られたそれらの作品は、彼の画業のなかでも重要な位置を占めるものです。本展では『ミセレーレ』『サーカス』などの代表的な連作を中心に、140展あまりの作品を紹介します。

次いで、10月17日(火)から11月26日(日)までは、「ビュッフェ展—精神の漂白」を行います。1928年パリに生まれたベルナル・ビュッフェは、戦後具象絵画の旗手として華々しい活躍を繰り広げている作家です。モノトーンの画面のうちに鋭い線描によって描き出された人物や静物の像には、現代人がもつ不安や悲劇性が豊かに表現されており、評論家たちによって「ミゼラビズム（悲劇主義）」との呼称も与えられています。本展では、ビュッフェ自身の選んだ作品に基づき、初期から近年にいたる77点によって、その50年に及ぶ画業を回顧します。

この後も、12月2日(土)から1月28日(日)にかけては、技法や表現形式の面で従来の概念を越えるさまざまな新しい試みが行われている現代版画の多様な展開を紹介する「今日のプリントアート展」を、2月3日(土)から3月27日(火)までは、19世紀末から今世紀前半にかけて大きな発展をとげたイギリス木版画の世界を概観する「イギリス木版画展」をそれぞれ実施します。

一方、この間コレクションギャラリーでは、11月26日(日)までの会期で、独自の版表現で知られる帯広市在住の美術家、中谷有逸の造形世界を紹介する「中谷有逸展」を、12月2日(土)から3月27日(火)までは、能勢真美や寺島春雄ら道東ゆかりの作家たちの作品を紹介する「道東の美術—山と森と平原と」を開催します。



ベルナル・ビュッフェ
「二人の道化師」1955年

北海道立三岸好太郎美術館

三岸好太郎美術館では、所蔵する作品等により様々な角度から三岸好太郎の画業を紹介する所蔵品展を開催しています。8月31日から10月10日は、「アトリエの夢」のテーマで所蔵品展を行います。三岸好太郎は晩年、斬新なデザインのアトリエ新築を計画し、夢を託しますが、その完成を見ることなく亡くなっています。展示では、このアトリエの模型、三岸によるアトリエデザイン画ほか様々な関連資料を晩年の作品とともに紹介し、三岸がアトリエによせた様々な想いをさぐります。12月7日から2月4日、2月8日から3月31日は、それぞれ「風景画の抒情」、「幻想の光景－蝶と貝殻」のテーマで所蔵品展を予定しています。各期ごとに三岸芸術の新たな魅力を見つけていただければと思います。

10月14日から12月3日は、特別展「魅惑の婦人像－三岸好太郎の女性表現」を開催します。特別展は毎年2回、三岸の画業に関わるテーマにより館外の作品等もあわせて行なうものですが、今回は三岸の描く女性像に注目します。三岸は、その画業の初期から晩年にいたるまで、女性像を多く主題としています。可憐な少女から官能的な婦人像まで、多彩な表現で描いています。初期の作品は、岸田劉生風、アンリ・ルソー風のうちに、秀れた色彩感覚を生かしながらほのぼのとした情感を漂わせ、後には大胆な筆づかい、重ね塗り、さらには画面を尖った道具でひっかく等の実験的な手法も駆使して、即興的とも見える奔放さのうちに独特な魅力をたたえた画面が生み出されました。また水彩・素描作品では、多様な画材・手法により、意表をつくような描写も見られ、三岸のイメージの源泉がいかに豊かな可能性を持つものであったかをうかがい知ることができます。いずれもモデルの単

なる肖像というより、三岸の陶醉した女性美の表現であったといえるでしょう。館外の所蔵で、公開される機会の少ない作品を含む、三岸の女性像の秀作により、彼の女性美によせる情熱と表現の多彩さをご覧ください。

(また館蔵の三岸生涯の代表作も展示しますので、あわせてご鑑賞ください。)



三岸好太郎「婦人像」
昭和7年頃

財団法人札幌彫刻美術館

彫刻家本郷新は、野外彫刻の第一人者といわれます。「本郷新賞」は、生涯を通して野外彫刻制作に情熱を傾けた本郷新を記念して1983年に当館で創設しました。

「本郷新賞」の事業は、隔年で開催されています。今年度は、第7回を迎えることとなりました。今回は、1993年1月から1994年12月までの2年間に日本全国の公共空間（パブリックスペース）に設置された彫刻を対象として全国の美術関係者に推薦を依頼したところ、24点の作品が候補作品として推薦されました。これら候補作品は、集められた写真や資料をもとに厳正な審査が行われました。その結果、倉敷市JR児島駅前民話通りに設置された眞板雅文制作の『連山夢想』が「第7回本郷新賞」の受賞作となりました。

『連山夢想』は、宮城県丸森町の阿武隈山地で掘り出された泥かぶり石とステンレスが組合わされています。酸化鉄が付着している泥かぶり石のもつ独特の質感がかされ、山々がもつ奥深い力が表現されています。ステンレスの円盤は、山にかかる雲のイメージとして、刻々とうつろう周囲の風景や空あるいは雲を映し出し周囲の環境にとけこんでいます。

この作品は、JR児島駅と商店街を結ぶ大通りを兼ねた広場に、人と彫刻との好ましい関係を成立させる「陽だまり」のようにおかれています。ふと振り返ると、ずっと以前からそこにあったかのようにたたずんでいるその姿は、見る者の心を和まし、包みこむような優しさにあふれています。

受賞記念展である「眞板雅文彫刻展」は、8月4日（木）から10月1日（日）まで本館及び庭園で開催します。眞板雅文は、これまで環境との融合、あるいは植物の形象化による自然との対話をテーマに制作してきました。本展では、近作と、受賞作となった『連山夢想』の制作の経緯となるドローイング、これまでパブリックスペースにおかれた野外彫刻の写真パネルによる展覧となります。

記念館では、野外彫刻の石膏原型、及びブロンズ彫刻・絵画を展示します。

なお今後の事業として、平成7年度後期収蔵品展では別な角度から見た本郷新の造形の世界をご紹介します。10月中旬には、「秋の美術館めぐり」（仮称）を長野方面に予定しています。



眞板雅文「連山夢想」

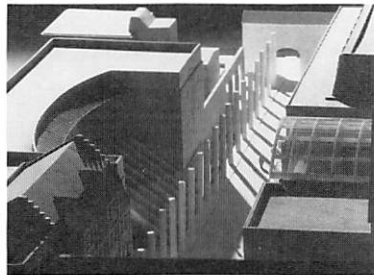
芸術の森美術館

8月5日から9月10日まで、「時間・空間・思索：彫刻家ダニ・カラヴァン」展を開催しています。

私たちが普段よく目にする絵画や彫刻は、どこに展示されても、同じように鑑賞者に対してさまざまなことを語ってくれます。しかし、展示場所が重要な意味を持ち、そこでしか成り立たない作品もあります。イスラエルの彫刻家ダニ・カラヴァン（1930-）が、世界各地に設置している作品がまさしくそれです。

彼は、設置場所の周囲の景観や、自然条件、さらには歴史などを作品に取り込みます。私たちはその場所が以前から持っていたそうしたさまざまな要素を、作品が置かれたことによってはっきりと認識するようになるのです。

写真の《人権の道》をみてみましょう。この作品は、1993年、ドイツのニュルンベルクに完成しました。ここは、ナチスがユダヤ人に対する差別を始めた街であり、戦後には国際軍事裁判が開かれました。ゲルマン民族博物館の新館と旧館に挟まれた広場の端には、中世の古い城門が残っていま



《人権の道》模型 1：200モデル

す。それに呼応するように、カラヴァンは反対側の端に白い門をつくりました。二つの門の間には、27本の白い円柱、2つのプレート、1本の樫の木が一行に並べられ、自由と平等をうたった30箇条の「世界人権宣言」が30の言語で記されています。人が人を差別し、殺し、裁いたこの地で、すべての人間に対して、その罪深い心を自覚し自戒することを促しています。

本展では、彼がこれまで手がけたさまざまな作品を、模型、デッサン、ビデオ、写真などで紹介いたします。また、1998年に札幌芸術の森野外美術館に完成予定の《隠された庭への道》の模型も初公開されています。展示レイアウトはカラヴァン自身が行い、さらに屋外には本展のためのインスタレーションが新たに制作されています。美術館全体に彼の世界

が広がります。

続いて9月15日から10月22日まで、国松登展を開催いたします。昨年4月に急逝した彼の遺作展として、初年から晩年までの代表作をあつめて紹介します。

★動き出した特別活動部★

昨年度の機構改革により新しく設置された「特別活動部」は、館外における活動を主体とし、美術館のPRや美術の振興に係わる事業を行うことを目的としている部です。

全くの新しい分野を開発していかなければならぬ部門で、現在部員13人が苦労を重ねていますが、各方面から大きな期待が寄せられています。

本年度は、当面の事業として「楽しい青空教室 Part 1」(楽しいぞ、空缶動物)を9月9日札幌市円山動物園で開催すべく準備を進めているところです。

今後、事業の拡大とともに部の体制も大きく膨らんでいくものと予想されますが、会員のみなさんのご理解・ご協力をお願いいたします。

★好評の特設売店★

従来、特別展が開催される場合、その展覧会に係わるグッズ等扱い商品のある場合は展覧会実行委員会等が会場の出口に特設売店を開設してきましたが、本年度は「モネ『睡蓮』と今日」展の開催にあたり、協会会としても特設売店を開設し多様なお客様のニ

ズに応えることにしました。来館したお客様の評判もいいので、「横山大観一海・山・空の世界」展でも開設に努力したいと考えていますのでご利用願います。

美術研修旅行記

恵みの雨に迎えられて

北九州美術の旅・雑感

石井 敦子



1時間近く遅れてようやくたどり着いた5月の南の街は雨に濡れていた。黒光りする瓦屋根の家々や見慣れない木々の鮮やかな緑に、ふと異国の旅という錯覚に襲われる。自然や言葉の違いという一般的な違和感に加え、給水制限という現実的な手続きが行われているという事実、暮らしでの「水」の重要性に気づかされると同時に、今異郷にあるという想いを強くした1日目の福岡。この日の雨が乾ききっていた水源に豊かな恵みをもたらした、とのニュースに、うとうとしさも忘れたものである。またホテルのロビーや夕食後の散策で頻りに耳にする中国や朝鮮の言葉に、北海道では感じられないアジアの近さ、そしてそのアジアから伝えられて、今のこの地方の文化を作り上げている歴史の重みをさっそく感じさせられる旅の始まりであった。

この旅のメニューでは美術館で絵画などを見るばかりでなく、日本の歴史の故郷の一つともいえる吉野ヶ里遺跡の発掘現場や、北海道では及びも付かぬ深い歴史を有する鍋島、有田などの陶磁器の数々に触れられるというのが魅力だった。今振り返ってみると、九州即ち日本の美、日本の歴史への関心が改めて刺激される旅であり、さらに北海道の持つ文化、歴史への興味のかきかけとなるもので、それは海外の旅でいつも気づかされるものと等しい想いでもある。

福岡市美術館のマグリット展、福岡県立美術館の松岡コレクション、北九州市立美術館の有元利夫展、長崎パレスハウステンボス美術館のザンキコレクション等の特別展や、久留米の石橋美術館で有する豊かな作品、長崎美術博物館の歴史ある収蔵品、そしてそれらの館を支える人々の「美」への思い入れ、すべてが印象深かった。日本の近代洋画史を支える黒田清輝や坂本繁二郎、青木

繁など、美術の教科書でも親しかった人々の作品がますます近くなる。これらの味わい深い作品とゆっくり向かい合うことが出来た時間は、日常の些事に紛れている身として実に貴重であった。同行コーディネーターの当を得た解説とたっぷりの鑑賞時間の組み合わせはありがたい。絵はそれが描かれた場所で、つまり空気や植物やそこに暮らす人間、そして歴史を肌で感じながら自分の目で見たい、そう思いながら国内外あちこち旅をして歩くのだが、今回の旅でも国造りの神話を思わせる絵に妙に納得して見入ったり、絵の中の緑と戯れる光を実際に外で目にしては、自己満足に浸る。陶磁器にしても秘密を守るためになされた藩の政策—高い技術を有する陶工達の生涯を山奥に閉じこめたこと—から話が始めると、小さな磁器のかけらに余りにも重い歴史が感じられてしまい、彼らが眠る山々を仰ぎ見て無言になる。

歴史に、美にとあれこれ想いを馳せつつ、しかし旅のもう一つの楽しみ、食と宿の面でも思い出の多いものであった。郷土料理の選択の上手さもさることながら3日目のハウステンボスでの一夜はまさにハイライト、パレスで見たコレクションの名品による感動を抱いたまま、ヨーロッパの贅沢さを満喫できるのである。浴室やホームバーの写真まで撮っているのは海外旅行並である。

大浦天主堂での結婚式やグラバー園での紫陽花を印象に刻み込んで、長崎の街をしっとりと濡らす再びの恵みの雨に送られ、4日間の旅は終わった。

- (上) 酒井田柿右衛門の柿の木の前で
- (右) パレスハウステンボスにて



花火とカクテル



山崎 達郎

此の表題に奇異な感じを持たれた事であろう。でも、この両者には多分に芸術的な要素があり乍ら、芸術とは認められていない、と云うことが共通しています。日本の花火は世界一とかで、外国へも花火師が招かれて行くそうですが、玉屋さんや鍵屋さん（今存在しているかどうか知りませんが）の御主人が芸術院会員になったと云う話は聞いたことがありませんから、多分なっていないのでせう。

以前芸大教授（故人）にその話をしたら、あまりにも短時間で終ったので芸術になり難いのだということでしたが、歌手も演奏家も、五十歩百歩ではないでせうか。

カクテルには普通飲まれて色とりどりの他に、虹の様に色分けしたものを、炎をマグからマグへ移して作るもの、スノースタイルグラスやフルーツのデコレーション等、色彩の工夫も豊富です、（亦重要な要素である）味や香りでは、日本には香道・茶道の様な、優れたお手本があります。更にコンクールでは、マナーが採点の対照になり、これも一部舞踊的要素を持って居るといえます。カクテルは二口か三口で飲まれて了う傍いもの故に、花火でさえ芸術でなく日本では、歴史の浅いカクテルは唯沈黙するしかないでせう。

自分らしさ



横路由美子

五月の連休に福祉の勉強というところでデンマークを訪ねた。車椅子の人や脳性マヒ等の障害を持つ人達と施設や養護学校・病院で専門職として働く人達総勢、二十三名の団体であった。デンマークに二十八年住みそこで家庭を持つ日本の方が現地のコメディエイトを下さきり、普通の旅行では行くことのできない種々の福祉の現場を訪れ、いろんな人達と会うことができた。誰もが一人の人間として大切にされ、自分らしく生きることの自己決定権が尊重されていることを目の当りにして感動を覚えた。

障害者も高齢者も大きな施設でなく家庭的なグループホームや在宅の人達が増えている。各人の個性が、それぞれの壁の絵は勿論、カーテンや家具まで個人の好みに設えてある。そのセンスの良さは目を見張るばかり。共通の居間の家具選びに、二ヶ月討議したグループもあった。個性はこだわりであり、自己主張であり自己決定権の基礎をなすということを実感した。「自分らしさ」「自分の生き方」は？と自問する旅でもあった。

山は呼ぶ



松山 隆子

「ネエこの花ミヤマアケボノソウでない？」「そうだワ」植物好きの友人と昨年の夏、日高幌尻岳山頂付近で交した感動の会話である。植物を観察しながらあの山、この山と歩いているうちに「いつか日高幌尻岳にトライしたい」とポツリ。するとこの夏に登山予定だという。しかし、一般登山者はなかなか入山することのできない新冠本流域に足跡を残すということである。幌尻岳七つ沼カールまでの沢登りルートである。以前日本一美しい沢と云われる大雪山クワウンナイ川を化雲岳までアタックの経験はあるが日高の沢は一段と厳しく不安がつのる。「この機会はないいかもしれない」の励ましの言葉に奮起するがやはりかなり厳しく、激流をザイルで迂回する場所に何回も遭遇し体力の限界を感じながらの登頂である。テント生活を楽しみ晴天の頂上に立つと日高山脈の山々の稜線は青く美しく最高であった。

「ネエこの花ミヤマアケボノソウでない？」「そうだワ」植物好きの友人と昨年の夏、日高幌尻岳山頂付近で交した感動の会話である。植物を観察しながらあの山、この山と歩いているうちに「いつか日高幌尻岳にトライしたい」とポツリ。するとこの夏に登山予定だという。しかし、一般登山者はなかなか入山することのできない新冠本流域に足跡を残すということである。幌尻岳七つ沼カールまでの沢登りルートである。以前日本一美しい沢と云われる大雪山クワウンナイ川を化雲岳までアタックの経験はあるが日高の沢は一段と厳しく不安がつのる。「この機会はないいかもしれない」の励ましの言葉に奮起するがやはりかなり厳しく、激流をザイルで迂回する場所に何回も遭遇し体力の限界を感じながらの登頂である。テント生活を楽しみ晴天の頂上に立つと日高山脈の山々の稜線は青く美しく最高であった。

絵との出あい



北洞 和子

日本画を習っているせいか、暇があると画集を開いています。それらの画集で目になっている絵の本物と展覧会で出逢った時は、感慨ひとしおです。

何年前のことだったか、札幌の近代美術館で開催された山種美術館展で、山口華楊の「木精」（一九七〇）に出会いました。前から気になっていた絵ではありませんでしたが、画面全体から伝わる静寂の中の力強さやうたれ、清澄な精霊さを感じる色彩と迫力に吸い込まれそうになった感覚は今も残っていて、数多く見た日本画の中でも印象深い一つになりました。

また、旅先で偶然見つけた美術館での思いがけない展覧会との出逢いも印象深いものです。一九八九年箱根・芦ノ湖で、遊覧船を待つ間に見つけた成川美術館の開館一周年記念特別展で、思いがけずみる事が出ました。「山本丘人展」も忘れられませんが、日本画の展覧会に飢えていた私には、とても感激でした。少ない時間ギリギリまでみて、芦ノ湖をはるか下にもろい小高い丘を急ぎかけ足で降りた旅は、今もよく思い出します。これからも、おりにふれて沢山の感動に出あいたいと思っております。

情報コーナー.....

現在額 3,000,000 円

各種団体の集まりなどで、会費の収納状況に嘆きの声を耳にすることが少なくありません。それに比較して、協力ははまだいいほうかななど思ったりもしますが、現在 3,000,000 円が未納額となっています。このうち 2,200,000 円程度が 2 年目に入った未納額です。

会員数は増えても、会費収入が増えないのが現状と言えるのかもしれませんが、ご承知のように協会の会員は「美術館に協力したり、美術に関する知識と教養を向上させるための事業を行う」ことに賛同いただいた方たちなのです。決して「会員証があれば美術館がフリーパスだから」という認識での賛同ではないと理解しております。

「最近は、見たい展覧会がないから止めたい」という

ご意向の方もいますが、協会の主旨をご理解のうえご協力を継続していただければと思います。

会費の納入については、その時期には郵便振替用紙を同封して請求させていただいていますが、これは振替手続きが小樽の貯金局経由になるため会員証到着まで 1 週間から 10 日くらいの日数がかかります。会員証が即発行され一番手とり早い方法は、近代美術館の 2 階売店で支払われることです。この方法は本紙を通じて何度かお知らせしてきましたが、まだその利用が少ないようです。美術展を観覧のついでにでもお立ち寄りください。

なお、何かの都合で退会される場合は必ず退会届を、住所が変わった場合はその変更届を提出されるようお願いいたします。

新入会員の紹介

ご入会ありがとうございました (平成 7 年 1 月～平成 7 年 6 月)

【個人会員】

1 月

松浦 珠美 札幌市
 薩川 広子 札幌市
 大石 慶子 札幌市

2 月

林 緋紗子 恵庭市
 須磨 範子 札幌市
 菊地 美代子 小樽市
 渡中 村 桂子 岩見沢市
 廣川 侑子 札幌市
 小林 野紀子 札幌市
 小平 野正浩子 札幌市
 谷山 山愛子 札幌市
 高村 上基子 札幌市
 久野 田和子 札幌市
 成北 洞和子 札幌市
 佐々木 林 浩子 札幌市

3 月

門脇 昭子 札幌市
 斎藤 圭子 札幌市
 谷口 慎子 札幌市

鈴明 木石 康子 当別町
 松山 千鶴子 石狩市
 柴野 雅子 札幌市
 菊池 雅子 札幌市
 仲田 芳子 札幌市
 横井 まみ子 江別市
 小華 仲富美子 札幌市
 吉三 和子 早来町
 河三 浦好子 札幌市
 松木 留美子 札幌市
 水大 上真知子 札幌市
 石原 洋子 札幌市
 伊藤 大石 哲也 旭川市
 伊藤 志保子 札幌市
 4 月
 出飯 喜美子 札幌市
 飯田 鈴子 札幌市
 盛奥 貞子 札幌市
 橋本 玲子 札幌市
 小田 美子 札幌市
 古田 倫子 札幌市
 尾田 美智子 札幌市
 仲野 三郎 札幌市
 渡部 三郎 札幌市
 村田 茂等 滝川市

森田 文雄 札幌市
 田中 幸子 札幌市
 野田 幸子 札幌市
 内本 千恵子 札幌市
 伊藤 広子 札幌市
 坂川 百子 札幌市
 有田 久子 札幌市
 鹿野 順子 札幌市
 片山 睦美子 札幌市
 筒井 トシ子 札幌市
 番匠 克宏 札幌市
 5 月
 川美都子 札幌市
 小三 淳子 室蘭市
 松浦 佳美子 札幌市
 高坂 林子 札幌市
 佐藤 和子 江別市
 嘉村 泰子 札幌市
 井本 美江子 札幌市
 竹本 弘子 札幌市
 杉本 善秀子 札幌市
 武田 千恵子 札幌市
 川畑 摩沙子 札幌市
 金坂 喜志子 札幌市

首富 藤正 圭子 札幌市
 宮池 上陽子 札幌市
 井本 文江子 札幌市
 青木 率子 札幌市
 6 月
 賀津 泰子 札幌市
 安田 華江子 札幌市
 藤野 豊一子 札幌市
 平井 裕子 札幌市
 藤野 井野子 札幌市
 只野 山克子 札幌市
 丸山 木和子 札幌市
 佐々木 原典子 札幌市
 田山 隆子 札幌市
 松宮 植野功大尾 札幌市
 植山 形林 函館市
 若富 富林 札幌市
 小松 吉原 札幌市
 塩須 原見 札幌市
 垣原 鶴智子 札幌市
 須原 見智子 札幌市
 須原 智子 札幌市
 須原 智子 札幌市

大きな羽ばたきを見せる協力会ボランティア活動

協力会ボランティアの活動領域は、平成6年度の組織改正により従来は売店・解説・資料の3部門でしたが、新たに事業・広報・研修・特別活動の4部門が加わり事務局は7部体制でスタートしたところです。

その7部は、全員ボランティア活動員によって構成されていますが、組織改正の当初年度から活発な活動を開始しました。この新しい体制は、業務処理の不慣れや、スタッフの不足などを克服し意欲的な取組をみせていますが、平成6年度の活動実績は下表のとおりとなっています。

平成6年度協力会事務局ボランティア活動員の活動実績報告

平成7年3月末現在

	事業部		広報部		売店部		解説部		資料部		研修部		特別活動部	
	項目	活動回数 延べ人数	項目	活動回数 延べ人数	項目	活動回数 延べ人数	項目	活動回数 延べ人数	項目	活動回数 延べ人数	項目	活動回数 延べ人数	項目	活動回数 延べ人数
各部専門活動	発行業務	35 101	協会会々報業務	10 86	常設売店 1階、2階		これくしょん・ぎゅらりい 解説 1階 (実働回数)	397 397	道立近代美術館資料整理新聞	970 970	美術講座業務	31 138	準備委員会	15 *59
	会員の集い業務	21 92	部内報発行業務	16 81	特設売店 販売業務	221 1,548	2階 (実働回数)	216 216	スライド	311 311	活動員養成 研修業務	11 54		
	アミューズ・ランドの手伝	37 *144	PR活動業務	2 32	商品仕入れ	7 20	団体オリエンテーション	8 8			活動員の手引 発行業務	12 64		
	ミュージアム・スクール手伝	32 *151	展覧会案内配布	5 45	商品在庫整理	2 17	ARS	294 618			展示替えに伴う 特別オリエンテーション	12 50		
協力活動			ポスター配布	10 *700	会員対象特別 セール業務	3 229	三岸好太郎美術 館解説	148 148			全体勉強会 講演会	4 2	16 10	
	ポスター配布	9 80	アミューズ・ランド	4 8	ポスター配布	10 180	ポスター配布	10 120	ポスター配布	10 50	ポスター配布	10 20	ポスター配布	10 20
			ミュージアム・スクール	4 7	アミューズ・ランド	11 22	アミューズ・ランド	19 37	アミューズ・ランド	10 20	アミューズ・ランド	3 6	アミューズ・ランド	1 1
					ミュージアム・スクール	3 5	ミュージアム・スクール	9 36	ミュージアム・スクール	8 25	ミュージアム・スクール	4 4	ミュージアム・スクール	1 2
その他の動向			特別活動部への協力	1 1	特別活動部への協力	1 1	特別活動部への協力	10 11	特別活動部への協力	10 10	特別活動部への協力	1 1		
			部員養成研修	13 26	部員養成研修	15 95	部員養成研修	27 129	部員養成研修	16 107			部員養成研修	14 *37
	各部共通研修 参加	4 43	各部共通研修 参加	3 26	各部共通研修 参加	11 247	各部共通研修 参加	11 338	各部共通研修 参加	11 183	各部共通研修 参加	11 58	各部共通研修 参加	11 29
	部会	12 115	部会	12 98	部会	3 84	部会	3 92	部会	12 276	部会	5 30	部会	7 21

◎平成7年3月31日現在 ボランティア活動員総数 143名 事業部 12名 広報部 10名 売店部 32名 解説部 51名 資料部 30名 研修部 5名 特別活動部 3名

活動の区分

◎各部専門活動 (部、本来の活動)

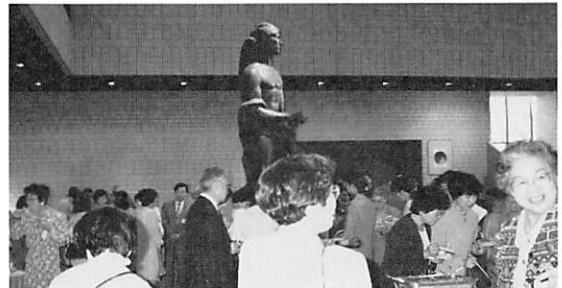
◎協力活動 (他部が活動の核になり、それに対し協力及び援助をする活動) ※印 各部の協力、援助の合計数

以上

第13回会員の集い マジックも飛びだして

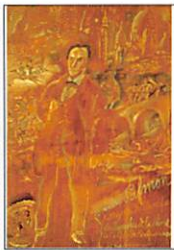
6月6日、通常総会に引き続いて、会員の集いが実施された。今回は岩内町大仏殿帰院住職 梅庭昭寛氏の講演「来世について=浄土の美学=」を拝聴し、心が浄められたような、清々しい雰囲気となった。その後、パーティが開かれ、札幌メディカルマジッククラブ事務局局長 石川富三氏によるマジックショーによって盛り上がった。

本年度の参加者は124人。来年も、より沢山の会員が集まることを期待しています。





佐藤忠良「ボタン」(1989)



ジュール・バスキン「アンドレ・カモンとモンマルトル」(1921)



ジュール・バスキン「二人のモデル」(1924)



ジュール・バスキン「白いリボンの少女」(1928)



深井克美「バラード」(1973)



ドミエ・オノレ「ホルダー議会」



岩田久利「孔雀文彫形花器・樓閣」(1980頃)



ドーム「あざみ文花器」(1900頃)



ドーム「翼に舞蓮三耳花器」(1894頃)



ガレ「昆虫文双耳花器」(1880頃)



ガレ工房(フランス)「草花文ランプ」(1904~1914)



エミール・ガレ「カトリア文花器」(1900頃)



エミール・ガレ「鯉文花器」(1878頃)



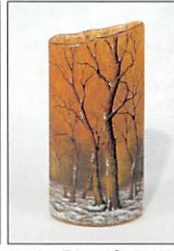
エミール・ガレ「ガラス工場風景文花器」(1900)



エミール・ガレ「雪中竹に鷹文花器」(1897~1908頃)



ドーム兄弟工房「野菊文花器」(1900~10)



ドム・ガラス工房(フランス)「雪に寒木文花器」(20世紀初)



フランスのガラス工房「文花器」(1900頃)



ラリック工房「草に虫文花器」(1920頃)



オーギュスト・ジャン「菊文花器」(1880頃)



イギリスの工房「蓋付瓶」(19世紀後半)



ボヘミアの工房(チェコスロヴァキア)「高脚杯」(19世紀中)



ラリック工房「いばら文花器」(1920頃)



ジュール・バスキン「シラカヤシリス」(1930)



エミール・ガレ「花に蝶文ランプ」(1900頃)



若田藤七「水指・雲間」(1975)



藤田善平「飾器 弥生」(1982)



木田金次郎「青い太陽」(1955頃)



バスキン・ジュール「環繞の構図」(1915)



ジュール・バスキン「仕事場のモデル」(1923)



上野山清寛「室内」(1928)



深井克美「旅への誘い」(1975)



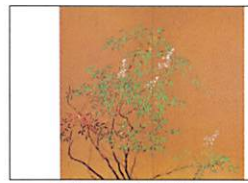
山口達春「籠中春花」(1956)



林竹治郎「朝の祈り」(1906)



木田金次郎「夏の岩内港」(1960)



山口達春「暖冬(部分)」(1933)

近代美術館 1階売店で取扱っております。